

九楊先生の ふるさと豆辞典

「もう二度と帰ることはないかもしれない」とふるさと武生を離れ半世紀以上。とはいへ、原点はふるさと福井。そんな九楊先生の独断と偏見あふれるお国自慢。

閑話九題

- 1 たけふ菊人形** 【越前市武生中央公園】
たけふ菊人形が始まったのは昭和27(1952)年。大阪府枚方市の菊人形がモデル。私の父が市役所の商工課員として企画。実現。自宅で「藤娘」など菊人形展のポスターの原画までを描いていた。
- 2 夜叉ヶ池** 【南条郡南越前町】
福井・岐阜・滋賀三県の県境、標高約1200メートルの山頂近くにある、龍神伝説が伝わる神秘的池。泉鏡花の戯曲に「夜叉ヶ池」がある。小学校5年のときに登山。透きとおった水中に黒と赤のアカハラ(いもり)ばかりで、魚影のまったく見えない静寂の池。私の高所恐怖症はこの登山から。
- 3 岡太神社・大瀧神社** 【越前市大滝町】
大滝町は越前和紙の生産地。「和紙の神」をまつる神社。とりわけ二層の檜皮葺の屋根の様式は圧巻。ちなみに日本初のお札は福井藩の製造。黒透かしも越前和紙職人の手による。
- 4 花籃公園** 【越前市粟田町】
数多い花見名所のお勧め。産声をあげた母方の実家の近く、春・夏の休みにはよく遊びに行った。公園全体に桜があるが、とくに薄墨桜は名高い。ただし中腹まで登らないと見ることはできない。公園名は世阿弥の謡曲「花籃」(はながたみ)にちなむ。
- 5 平泉寺白山神社** 【勝山市平泉寺町】
若くは京都松尾の若寺と西芳寺? いやいや、否否、苔の深さといえスケールといえ、白山神社にはかえりきれない。梅雨どきから夏にかけて境内すべてが苔で埋め尽くされる美しさは忘れがたい。国史学者、平泉澄はこの出身。
- 6 那谷寺** 【石川町小松市】
福井県に近い石川県の浄土真宗証如ゆかりの寺院。中学時代の遠足で出かけ、当時写真部員としてシャッターを切りまくった記憶がある。何ゆえか、大きな忘れものをしたようで、もういちどどうしても訪ねてみたい寺。
- 7 奥越の紅葉** 【大野市・勝山市】
九頭竜川の上流を遡る奥越の紅葉は見事。紅葉ばかりではなく、切り拓いて植林した緑の杉も垣間見られるが、その生活と歴史とともにある自然の景色がなんともいとおもしろい。
- 8 村国山** 【越前市村国町】
かつて武生は漢字の多い土地柄だった。そこで村国山を香炉峰で名高い中国の名山になぞらえて盧山と呼んだ。家の窓から見える盧山に春夏秋冬、私はいろんな言葉をかけ、よき相談相手になっていた。
- 9 三国海水浴場** 【坂井市三国町】
今もあるのだろうか。母方の祖母は三国の旧舟問屋の舟屋の出身で夏は家族で海水浴に。キラキラまぶしい夕陽が周囲の砂や建物を金色に光り輝かせたシーンは今も鮮やかに記憶に残る。崖の上の老舗旅館が閉店したと聞いたが。

いまでも残るか? 福井弁



- 1 あのおー、○○ちゃんがいー、××ちゃんに△△したんやわのー** (○○が××に△△した)の意味。ひと口ごとに末尾の母音を伸ばし重ね、出だしはゆっくりとレントに始まり、終わりは大急ぎのプレストで一気に切りあげる。これが福井弁の基本形。以下は福井弁。
- 2 おちよきん**
これは「直繁」の漢語に由来か。正座すること。親は子をしつけた。「おちよきんしねま」——正座しなさいと。
- 3 じよらかく**
本願寺中興の祖・蓮如の里、仏教王国、福井。「丈六仏」からきたか。あぐらをかくこと。
- 4 いもけ**
京に「けず」や「じゅんさい」本人がいるように、土地の人柄に特徴的な性格があり、それを指す独特の言葉がある。福井では「いもけ」。引つ込み思案、ぐすくすした人。
- 5 しゃべりばち**
「いもけ」が「しゃべりばち」も。おしゃべりの「撥」か。「いもけ」同様、過ぎたるは及ばざるがごとし、好ましい人ではない。
- 6 てきねえ**
別段「敵がいな」わけではない。体調がすぐれないこと。関西では「しんどい」を福井では「てきねえんやわの」。
- 7 だわもん**
ダメな者という意味か。なまけもの、さぼり、横着者。
- 8 もつけねえ**
「もつけねえ」とも。かわいそう、気のどく、気をもむというような意味。
- 9 うい**
「わた」のこと。複数形は「うらら」。共同意識の高さから「うらら」をよく使う。「うら」はところ、裏日本とはころ日本。「おもて」はうわべ、表日本とはうわべ日本。

おいしい福井

- 1 塩練うに** 【坂井市三国町】
越前の塩練うにはパフウニの卵巣を塩で練りあげて作る、贅沢な逸品中の逸品。箸の先に豆粒ほどをつけて酒一合、または白飯に一口。他県のうに自慢が食べたところ、一口なめたたんんと頭を下げた。
- 2 スポガニ** 【越前海岸沖】
地元では越前ガニ(オスのズワイガニ)はまず食べない、食べられない。セイコガニ(メス)はかつては子どものおやつ。ここだけ内緒のおすめは、スポガニ(水ガニ)。脱皮してすぐの甲羅の柔らかいズワイガニ、地元でなければ食べられない。みずみずしく、殻からスポと身がはがれるのでこの名があるとか。
- 3 水ようかん** 【福井県下】
「冬、こたつ」といって福井では「水ようかん」を連想する。夏の涼菓子ではなく、冬に食べる。近畿圏には「丁稚ようかん」があるが、水ようかんは水分と糖度のバランスが絶妙。「ツルつ」とひと口。水ようかんはこたつで口にするに限る。
- 4 上庄の里芋** 【大野市上庄】
奥越大野上庄地区の里芋はねばりとコシがあつて、かつ柔らかな絶品。東京赤坂の一流割烹店でもご愛用。上庄里芋を食べるとパワーがみなぎる。
- 5 花らっきょ** 【坂井市三国町三里浜】
三里浜辺で採れる小粒のらっきょ。通常は一年弱で収穫するが、花らっきょは冬を二回越させる。小粒で歯ごたえがよく、シャキシャキとした食感が身上。カレーのわき役ではもったいない。れっきとした主役の味わい。紫色のらっきょの花も愛らしい。
- 6 白山すいか** 【越前市白山地区】
越前市白山地区で栽培される極上スイカ。果肉は真っ赤、真っ赤。栽培量が少なく、地元の人でもなかなか口にできない。時代にさかたって大玉で重量感たっぷり。白山地区の気候と土壌、そして丁寧な仕事からできあがる。
- 7 すこ** 【嶺北地方】
紅ずいきを空炒りして、最後に甘酢に浸して寝かせると、まっ赤な「すこ」ができる。素麺、鯉など何ぞ夏、ましてスコをや。これを食べなま夏ではない。
- 8 コシヒカリ** 【福井県下】
ほとんど知られていないが、コシヒカリは福井の県農業試験場から生まれた。宣伝上手の越後ではなく越前のコシ。近年新種「いちほまれ」が生まれた。
- 9 焼き鯖** 【福井県下】
60年代まで、鯛のようにふくらとした大きな真鯖がよく揚がった。焼きたてのアツアツはやわらかく脂がのって美味だった。今ではサンマのような鯖ばかり。そこで登場したノルウェー産の若狭浜焼き鯖。これはただではない。若狭の名が泣く。

石川九楊の世界

書という文学への旅

石川九楊直筆原稿『河東碧梧桐—表現の水統革命—より

「模索する石川九楊」1978「はぐれ鳥とべ」シリーズ著作初公開通期
「若き日の石川九楊」1966「1975未発表作品」／「石川九楊の現在—自作詩文選」2001「2020」12月8日展示替え

鑑賞のポイント
若き日の未発表作品(初公開)から最新作まで(一部展示替え)
代表作・話題作 最近著作までの全書、およびそれらの直筆原稿を展示
日本最大級の巨大視覚的愛用の書字文房具を展示
制作風景代表書作品のVTR映像を公開

2020年 10月23日(金)〜2021年 1月24日(日)
福井県ふるさと文学館秋季企画展
福井県ふるさと文学館秋季企画展
【開館日】火〜金 9時〜19時 土・日・祝 9時〜18時
【休館日】毎週月曜日(1月23日・1月31日)は開館翌日休館、11月4日(金)、11月26日(木)、12月24日(木)、年末年始(12月29日〜1月3日)

【主催】福井県ふるさと文学館
【後援】福井新聞社・FBC・福井テレビ・FM福井・丹南ケーブルテレビ
【協力】京都精華大学・ミネルヴァ書房・名古屋大学出版会・株式会社ほぼ日

福井県 FUKUI MUSEUM OF LITERATURE
ふるさと文学館

鬼才・石川九楊の批評と作品はどのように生まれたか。
多数の初公開作品からその創作の全貌に迫る。

福井県 FUKUI MUSEUM OF LITERATURE
ふるさと文学館
〒918-8113 福井県福井市下馬町51-11
TEL 0776-33-8866 FAX 0776-33-8861
E-mail bungakukan@pref.fukui.lg.jp
HP http://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/

フレンドリーバス(無料)
JR福井駅東口バスターミナルから約15分
路線バス
JR福井駅西口交通広場5番のりばから
市内バス(62系統・一乗谷東郷行き)約12分
自動車
北陸自動車道福井インターより約15分
国道8号線板垣交差点を東に折れ約900m



書、時代、文学

三つのキーワードから石川九楊の世界にご案内します。



書

著作コーナー……広い分野におよぶ100冊以上の全著作を一堂に展示

書は文学か？



「文字ではなく言葉を書く、書と文学は地続き」と石川九楊は語ります。「書は何を表現するか」の解明をへて書字論を確立。書、文字、漢字、ひらがな、東アジア、日本語、日本文化へと広がる評論を発表。書と歴史と文化、手で書くことの意味を解き明かす評論の仕事の全貌に迫ります。

『中国書史』『日本書史』『近代書史』

古代中国から現代日本までの歴史を作品に即して解説。漢字を使う東アジアの国々の歴史と文化に、書がどのような影響を与えているかを説いた書史三部作。30年の歳月をかけ論考を重ねたライフワークで、東アジアの書の歴史の全貌が展望できる大著です。



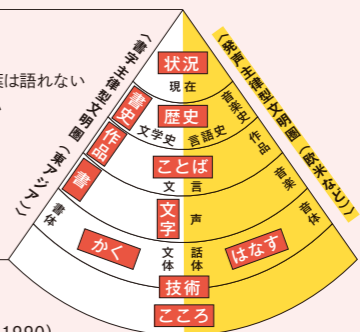
『筆蝕の構造』

手に持つ筆やペンが、紙に触れ文字(痕跡)を残して離れるまでのさまざまな出来事を「筆蝕」と命名。「書くとは筆蝕すること」という原理を明らかにした記念碑的著作。石川九楊の代表作。



【石川九楊の論及分野】

状況 論=書くことと時代
 文字 論=文字ではなく、言葉を書く
 言語 論=文字ぬきで東アジアの言葉は語れない
 国家 論=文字のちがいが国のちがいを
 東アジア論=漢字がつくった東アジア
 書 論=書は言葉のスタイル
 作品 論=筆蝕(書きぶり)の美学
 書史 論=書くことと文化の歴史
 技術 論=どのように書くか



【受賞歴】

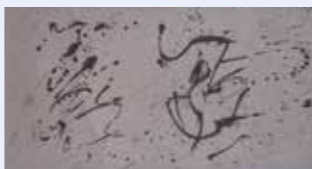
- サントリー学芸賞 (1990)
- 『書の終焉』(同朋舎出版)
- 京都府文化賞功労賞 (2000)
- 文化芸術活動を通じ文化の向上に功労
- 毎日出版文化賞 (2002)
- 『日本書史』(名古屋大学出版会)
- 日本文化デザイン賞 (2002)
- 文字にまつわる多数の著述による思想展開と、先鋭にして驚異の書の実践
- 京都新聞大賞文化学術賞 (2003)
- 書家としての活躍や「書く」ことの重要性を訴え続けた功績
- 大佛次郎賞 (2009)
- 『近代書史』(名古屋大学出版会)

他

式

作品コーナー……若き日の未公開作品と習作、そして近年の話題作を公開

時代を表現する？



「墜落」



「美と喧騒の死焉」



「磔刑」

『灰色の時代』の作品 (1966～70)

谷川雁・吉本隆明・田村隆一など詩人たちの現代詩を題材に、「時代に釣りあう表現」を追い求めていた時代の作品。薄くグレーに染めた紙を使い、その濃淡のなかに時代の言葉の重なりを表現しようとした「灰色の時代」の作品群です(会期中展示替)。



連作「はぐれ鳥とべ」のための未公開習作 (1978) 一挙公開

目隠しをする、左手で書く、包帯を掌に巻きつけて不自由な状態で書く……。書けなくてしまふ作品から脱けて、新たな表現を求めて格闘した数々の作品です。この試みをへて、「はぐれ鳥とべ」で再び白い紙に復帰しました。



【令和論ヒワレイン・レカリ】の騒動記

自作詩文作品 (2001～現在)

9・11事件に題材をとった作から現在にいたる話題作十数作を公開(会期中展示替)。「灰色の時代」をへて「歎異抄」「源氏物語」など日本古典に退却した作品を通して、再び時代を表現する書へと向かいます。「書くことなど何もない。それゆえ書くのだ」と自作の詩文に取り組みました。

参

九楊を知る……筆蝕、二重言語国家・日本、東アジア漢字文明圏、そして肉文字

書＝文学とは？



最新著作

『石川九楊自伝図録 わが書語る』

みずからの書の制作の歴史を語った初の自伝的図録。小学校入学以前の書との出会いから、試行錯誤を重ねた若き日、古典作品への回帰、そして再び時代を表現する現在……。作品図版を多用しながら、制作の歴史と人生を語っています。12回の講演が一冊の本として刊行されるまでの全過程を公開します。



最新著作『河東碧梧桐』の全参考資料・全原稿を一挙公開

正岡子規門下の一の高弟でありながら、高浜虚子と俳壇によって「消しゴムで消された俳人」河東碧梧桐の、書と句作と思索に迫る初の評伝。碧梧桐の書に驚嘆して以来、30年以上にわたり集めた関連資料を縦横に駆使して書き上げました(初出は『文学界』)。副題に「表現の永続革命」とあるようにみずからの書の制作史と重ねた匠の評伝です。



講義・講演手書きレジュメ初公開

原稿はもちろん講義・講演などのレジュメもすべて手書き。印刷文字かと思わせるレジュメの文字は、原稿の文字とはまったく書きぶりが異なり驚くばかりです。「日本語をヨコに書くのはアルファベットをタテに書くのと同じ」と語り、「肉文字」の復権を提唱する誌も解けます。文芸誌『文学界』誌上で発表したワープロ作文批判は、2000年代初頭、文壇の一大論争の口火となりました。

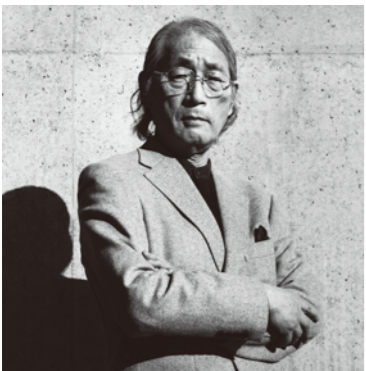


書名揮毫書籍

装幀デザイン分野でも活躍し、さまざまな書籍の題字揮毫・装幀・造本を手がけています。また、書字論の確立と実作の真贋鑑定の蓄積から、筆跡鑑定分野でも大きな実績を残しています。

文房四宝の初公開

愛用の毛筆、硯、墨、紙、筆記具、自作原稿用紙などを特別公開します。とりわけ120×60cmの超巨大硯、百本にのぼる筆は見ものです。



撮影・筒口重弘

石川九楊 いしかわ・きゅうよう

書家・評論家。京都精華大学教授・同文学文明研究所所長をへて現在、同大学客員教授。

昭和20 (1945) 年、福井県今立郡栗田部町に生まれ武生市(現・越前市)で育つ。武生市立東小学校、第三中学校、県立藤島高校をへて京都大学文学部入学。進学にあたり、書の師・垣内楊石より九頭竜川にちなみ「九楊」の名を与えられる。

同42 (1967) 年、京都大学卒業後、三洋化成工業株式会社(京都市)入社。同53 (1978) 年、11年間の会社員生活に終止符を打ち書家として独立。以来、作品制作と執筆活動に専念、いずれの分野でも最前線の表現と論考を続け、現在までに書作品千点・著書百点以上を世に送り出した。

【期間中の関連イベント】

10月24日(土) 14:00～15:30
講演会：「書という文学への旅」

定員 (50名) ・参加無料・要申込
 会場：福井県立図書館 多目的ホール

12月9日(水)

福井県ふるさと文学館 文学講座

- ①キャラリートーク(学芸員)——先着10名 13:00～13:30
- ②文学講座：「郷土作家の書を読む、文字を読む」 14:00～16:00

定員 (50名) ・参加無料・要申込
 会場：福井県立図書館 多目的ホール



【石川九楊サイン本販売】

館内カフェ「あすわの木」コーナー

【石川九楊揮毫

ほぼ日特製“おちつけグッズ”販売】

館内カフェ「あすわの木」コーナー

【白川文字学の室】(福井県立図書館内)

石川九楊の書論にも影響を与えた故白川静博士の自宅研究書庫をそっくり再現。著書や映像、関連資料にふれることができます。

※今後の新型コロナウイルスの感染状況によっては、イベントを中止・延期する場合があります。その際は、公式HPなどでお知らせします。

